
あれ？あはは。転生しちゃった

露真乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あれ？あはは。転生しちゃった

【Nコード】

N4987V

【作者名】

露真乃

【あらすじ】

転生するだけ……。ほんとドイツとかのお手伝いにしたかったけどありきたりすぎたのでイギリスですっ あらすじ見ただけじゃわかんないよねっ だからあらすじ見ちゃった人は本編見たほうが得ですよ〜

え？ちょっと待って！このおっさん誰！？（前書き）

初めましてっ！の人も違う人もこれからよろしくっ

え？ちょっと待って！このおっさん誰！？

ハロー　僕はひろとっっていうんだ　男子で平仮名とかかつこ悪いよね

でね！なぜか最近皆から「ヘタレ」って言われるんだ　なんでだろお

あゝゝ。かわいいにゃんこゝゝ？うわっ！かつちゃかないで！！痛い！この猫凶暴！！

うわっ！猫が噛んできたよ！！あれ？意識がとおくなってきた…？あははゝゝ僕死んだりして…

う？ここどこゝゝ？あ！死んだのか！あの猫なんだったんだろうな！毒猫？？

・・・てかマジで死んでる！？えゝゝ？？まだ僕中一だよ！？えゝ？？

・・・まあいいかつ

「今から君は転生します。」

うわあ！びつくりしたあ！！誰だよこのおっさん・・・。

「おっさんとはなんだよお！！・・・殺すぞっ」

「うわあああ！！ごめんなさいごめんなさい！！！」

何この人。めっちゃ怖い！！逃げよ！！

「逃げるな！話を聞け！！！」

「いやです」

「…」

うん。逃げよっ

「まあいい…。いまから君には転生してもらっ。」

転生って何？僕まだ食べたことないなあ

「ヘタリアという漫画を知ってるかね。」

「友達に熱く語られてあげくの果てに漫画を貸し付けてきたので知ってます」

「今からその世界へいってもらっ。」

うわ このおっさん大丈夫か？

・・・あ～～！！わかった！これ夢なんだ！！きっと猫に噛まれて
気絶したただだよ！！

「でわ行くのだ～～」

「え～～…これ夢でしょ？早くさめてよ～～。怖いし！！」

「夢じゃないし！！良いからはよいけ！！ユキ・カーランドよ！！」
「！」

「ええ！？待つて！誰それ！！」

「え？お前の名前だけど…。」

「カーランドってヘタリアの、イギリスの人名だよね！？」

「ああ。言い忘れてた。お前の名は今からユキ・カーランド。ヘ
タリアの世界でイギリスのお手伝いさんだ！」

「お手伝いさんならさ！名前一緒にすることないじゃん！！」

「え？だって考えるのめんどいしw」

ひどいつ!!行きたくないし!!!!

「いやっ!僕絶対に行かない!」

「いいから行けや!」

「あ~~~~!!?」

そうして僕は転生することになった。強制的にね

え？ちょっと待って！このおっさん誰！？（後書き）

でこれからよろしくお願いしますっ

ほっ、本物！？転生って良いなあ~~~~？

ん…？ここはどこだ？？たしかあのわけわからんおっさんにふつとばされて…

まず起きようかな…って、ええ！？

僕・・・女の子になってる！？てか何このかつこ…！

パジャマかわいい！！今僕が来てるパジャマかわいいすぎだよ…！
ピンクのワンピース型のパジャマにうさ耳フードって…！！

「うわっ！！…ああ…。こいつがユキか…」

うわあああ？本物だあ…！僕そんなにヘタリア好きじゃなかったしイギリスなんてかなり興味なかったのになんか一瞬でそんなことが全部覆されたよ…！！リアルイギイギかわいい~~~~！！

「なあ…一つ聞いていいか…？」

「は、はい。」

やっべ興奮とまんねっ…！！

「お前は男だと聞いていたんだが…あとそのかつこなんだ？？」

「質問は一つじゃないんですか？」

「ノノうるさいバカ…！早く答えろ…！」

「なぜか起きたら女の子でこのかつこでした 終わり。」

「まじめに答えやがれ…。」

「うわあああ…！ごめんなさい！すいません！でもこれ至って真面目なんです…！だからなんか変な技かけてくるのやめて…！」

いてて…。これならまずいといわれているスコーン投げられたほう

がましだよお…

「俺のスコーンはまずくないぞ馬鹿あ！！」

「なに勝手に人の心読んでるんですか！！プライバシーの侵害です！！」

「お前がでつかい独り言いつてたんだろぅがあ！！」

やあああ！！もうやだ！！誰か助けて！！！！

「そ、そうだ！！アーサーさん？でいいですか？僕がお手伝いって言っのは知ってますよね？？」

「ああ…。」

「な、何をすればいいですか？？」

「なにもなくていいぞ。大体は自分でできるし…。」

「ええ！？じゃあ僕ここにいない意味ないじゃん！！」

「じゃあその『僕』っていうのやめろ。いちおう今女だろ。」

「えゝゝじゃあなんて言えばいいですか？？」

「私…とかか？？」

私…私…しっくりこない…

「却下」

「て、てめえ！！人がせつかく一生懸命考えたのに！！」

「自分のこと名前呼びじゃ駄目ですか？？」

「勝手にしやがれ！！」

「じゃあ勝手にさせてもらいます」

ほかの国のとこ行きたい…。

「アーサーさん。ほかの国のとこ行きたいです。」

「あ、ああ。いいぞ。今日会議あるからみんなに紹介しようと思つてたしな。いちいち聞かれんのかめんどくさいだろ？」

「そうですね。知ってもらえるのは早いほうがいいですし…」

「じゃあ行くか…。」

「え！？もう行くの！？」

「ああ。さっさとしろ。」

ふふふふイタちゃんとかにも会えんのかなっ 超楽しみなんだけど
〜？

登場人物紹介的なもの！…うん　ちがうね

「こ、こんにちわっ！…アーサーさんのところでお世話になってる行きといたしますです！よろしくおねがいします。」

うわぁ！…最後めっちゃ噛んじゃったぁ…。はずかしっ／＼／

「よろしくね〜」

「ほなよろしくなあ〜トマト食べる??」

「ご、ごほんつ。よ、よろしくな…。」

「ドイツは見た目怖いけどいいやつだから怖くないよあ〜」

「あ、はい…。」

うわぁぁぁ！…マナイタちゃん！…あ、違う！…生イタちゃん！…可愛いなあ〜。あ〜でもフェリちゃんだよね…こっちでは…。親分もすっごいかわいいいいいい！！

ど、ど、ど、ドイツとかもめっちゃかわいい！！何これ！すげーすげーすげー

「H A H A H A！…俺がヒーローさ！！困った時はいつでも頼るんだぞっ　まあアーサーの家に住んでは気に入くないけどなっ　ご飯がすっごくまずいから気をつけるんだぞっ！！とくにスコーンはだめだ！絶対食べちゃだめだぞ！！」

「うるせえよ馬鹿ぁ！！！！」

「はは…。」

アル…かわいい？天国??ばく…違っや。ユキは悪いことしかしてないのに天国に来られるなんて…！！神様ありがとう！！

「ぼくはイヴァンだよ よろしく」
「よ、よろしくお願いしますっ」

なんとか笑顔をを保ったけど…

ロシアこええええ！！いやだ！この人なんか生理的に無理いい！！

「かわいいお嬢さん…。お兄さんはフランススっていうんだ。じゃあ行こうか！！」

「ど、ど、どこにですか……！？」

ふわああ！！この人も無理！！やだやだやだ！！やっぱ地獄だよ！！

「我は王ある！！気軽に話しかけるよろし！！」

あ……中国さんだあ？この人なら大丈夫だあ？癒される…。

「お、おれはロヴィーノだコノヤロー。覚えとけよ…」

うん。めっちゃかわいい！！萌え死……？

「私は本田菊と申します。趣味は空気を読んで言葉を慎むことです。どうぞよろしくお願いします。」

祖国……？塩塩塩塩……

「私はローデリヒといます。」

オーストリアさんだあ？雰囲気が好きなんだよね……

「エリザベータです。」

可愛い？・・・てか何でみんな人名なんだよ！！国名でいいよ！！

「バツシュだ！！覚えとくのである！」

この人いつも怒ってるから嫌いだあ…。

「ふえ、フェリクスだし〜。」

「僕はトリスっていうんだ。よろしく。」

によによ

「俺はギルベルトだ！！まあ、俺はかつこいいからもつ覚えただろ？」

でたWZA 不憫

「マシューだよ…。で、このクマさんが熊二郎さん…。」

クマ朗でしょww（クマ二郎です。

「誰？」

「マシューだよ！」

「H A H A H A いたのかい？マシュー」

「いたよ！！」

相変わらず影薄いなあww

「ピーター・カーランドですよ！よろしくですよ！..」

あゝそっかあ。シー君はイギリスの弟だったよね..。

「以上だ..。そういえばお前ちゃんと名前とかいってないだろう？」
「あ！そうでした！..えつと、ユキ・カーランドといいます！！
アーサーさんのお手伝いです！！ここには転生というもので来ました！元日本男児です！！よろしくお願いします！！..」

あれ...？こいつ何言ってるんだ的な目で見られたよ...？まあいいか。
気にしない気にしない

登場人物紹介的なもの！…うん　ちがうね　（後書き）

これ以外の人でもできるかもです〜〜

うああああ…。…楽園みたいやんなああああ？

「ねえねえユキちゃあああん！！」

あ、フェリちゃん？かわえええ？

…うぶつ。いまお腹痛いんだった…。

「…？どうしたのユキちゃん。」

「あははは。いまお腹痛いんだあ…。」

「大丈夫？痛い痛いのとんで行け…。」

何このかわいい行動！！超可愛い超可愛い？治らないけど痛くなくなつたような気がしないでもない！！

「ほんとに大丈夫？ルート呼ぶ？」

「あははは…。大丈夫だよ…。いててて…。」

「うわあああ。ユキちゃん、死んじゃだよあ…。」

勝手に殺すな でもかわいいから許す！ハアハア

「…あれ？なおつた…。」

「ほんと！？嘘じゃない？？？」

「うん…。」

「よかつたあ…。」

かわいすぎる！ちがう意味でやばいかもおお！！

「ほ、ほんとに大丈夫？息すつごい荒いよ??」

「だ、大丈夫大丈夫…。」

「ほんとにホント？」

「うん。ほんとにホント。」

でもほんとなんで治ったんだろ…。やっぱフェリちゃんの可愛さのおかげかなあ？？

「もしかしてさ。ユキちゃんがお腹痛いのって、アーサーの料理食べさせられた？？」

「いや…たぶん違うかな？？料理はユキも人のこと言えないけど、いちおうアーサーさんは作ってない…。」

うん 最初はアーサーさん自分が料理作るって言ってたけどさすがにそれは僕が死にそうだったから…。

「うお、ユキ？こんなとこで何やってんだ？」

「あ、アーサーさん。フェリちゃんと話してただけですよ。」

「ふーんそうなのか…って、フェリの姿がどこにもないぞ？」

「あれ？さっきまでいたんですけどね…。ところで…それなんですか？」

「ああこれか？俺の新料理！ミラクルスコーンだ！！」

「ミラクルスコーン？」

何それ。いやな予感しかしない…。

「これはな、最初はバナナ味。次第にチョコ味へと変わっていった、その次はカレー味。で、最後にマンゴー味でfinaleだ。」

うっ。考えただけで気持ち悪く…。

「ほら食ってみろ！！」

「あの、いまお腹痛いんで……」

「さっきフェリになおったって言うてただろ？」

聞いてたんかい！

「いえ、また痛くなってきたので…」

「じゃあなおさらこれ食べ！うますぎて痛いのか吹っ飛ぶぞ！」

マズすぎて痛いのが吹っ飛ぶの間違いでわ？

「ほら遠慮すんなつて。」

「や、やめてくださ……。」

「ほら早く食えよ!!!」

何これ……。いじめ？

「ほら！早く！」

「らめええええええええええええ！！」

こうしてユキの腹いたは悪化したのであった。

あはっ うん

ユキだよ〜

いままで更新できなかったのはアーサーのミラクルスコーンで病院
送りになってたからさっ

嘘つくなって言われてもなああ…。

まあ嘘なんだけど（キラッ

うわあああごめんなさいいいい

「って、何やってんだ？僕。こんなところで。」

ん〜なんか「ピーー」ってなの人に嘘ついてばこられてた気がするんだけど…

あ、夢か。夢ならしょうがない。

って、夢じゃない。

体中めっちゃ痛い。動けないしw

・・・？ん？何これ…。

どおしよ。

「アーサーさあん！アーサーさあん！！助けてえええ」

「なんだよユキ。どうしたんだってうわっ！何だよそれえええ」

「あ、ちよっ逃げないでえええ」

「だって、それ、うわあああああああ」

「アーサーさあああああん!!!!!!!!!!!!!!」

「アーサー君　ちよつとユキちゃん借りるねっ」

そう。僕の上に血みどろの水道管を持って怖い顔をしたコルコル星人、いやすみません。怖い顔をしたヴァンサンが座っていました。

…まさかそれですつと僕のこと叩いてたわけじゃないよね？

僕の頭とかからちが結構出てるんですけどw

「よいしょ。」

ひいつ！持ち上げられたあああ

「やめてえええええええええ！アーサー助けてええええええ。うわああああ！」

「もう、うるさいなあ。えいつ」

ごすっ

パタリ。

こうして僕の記憶は途切れた。

はっ！

＼（。ロ＼）ココハドコ？ （ノロ。）ノアタシハダアレ？

・・・なんてやってる場合じゃない…。

痛い！痛すぎるよ！

何これ！

うわあああん！帰りたい！おかあさあああああん！

猫の馬鹿やろおお！！

【ユキ ハ キョウフ デ ワレ ヲ ワスレテ コンラン シタ。
ー

ひつく。うつく。なんでこんなことになっちゃったんだよおお。

アーサー強いのに助けてくれなかった。

そりゃそーだよ。怖い顔で水道管持つてる人になんか逆らえないよね。しかも血だらけw

「うわあああああああん。誰かあああッああああ。びええええええええええええん」

「ふわっ！？ユキちゃん！？どうしたのっ！？」

「帰してえええええ。おねがいしますうう。何でもするからああああ」

「大丈夫。もうちょっとで帰すからねっ コルっ」

「…なにしようとしてるの？」

「んっ。アーサーに仕返し？」

それだけかああい！

アーサーのせいで僕巻き込まれちゃったのおお！？
家帰ったらこっちはこっちで仕返ししてやる！

「でもなんでボ・・・ユキを殴ったりしてたの？」

「え？ユキちゃんが傷ついたほうが盛り上がるじゃない。」

それだけかああ。それだけの理由で！

盛り上がりなくてもいいよ！

「あ、来たみたいだね。」

ふえ？

「ユキ！！！！」

「アーサー！！」

うんうん。感動のシーンだね

じゃ、つづく

アーサー、ユキを助ける、の巻（前書き）

前回の続きですお〜

アーサー、ユキを助ける、の巻

「アーサーさあん!!」

やっと来た！アーサー来てくれた！
助けに来たんだよね？

ちがったらぶっ殺しちゃうかもな

でも、助けるんじゃないかったらここには来ないよね？

うん。そう信じよう。

とか思ってるうちにアーサーはイヴァンサンにやられていた。

「え！？えええええええ！？早い！やられるのが早いよ！アーサーさあん！」

「ぐッ！なかなかやるな…。ユキ、ごめんな…。」

「ごめんな」じゃないよおお！

何あつさりとやられてるんだよおお！

ぐすん…。もう僕はここで終わりなんだ。

あ！アーサーさんにこれを言ったらきつと目覚めるな！
僕が攻撃されそうだけど…。

「あーあ。アーサーさんったら弱いなあ。まあいいや。アーサーさんのごはんおいしくないし。イヴァンさんアーサーをやつつけてくれてありがとう！」

「んだと、ユキ…。」

やったあ！起きたあああ

怒ってるけどそれは気にしない方向で

ドカツ！

「もう。アーサー君はうるさいなあ。ユキちゃんがう素直にお礼してるんだあくら僕もそれを受取らないとね」

ガクツ…

「アーサー ハ ヒンシ ノ ジョウタイ ニ ナッタ」

うあああああ！

逆効果だったあああ！？

アーサーさらに叩かれて完全に気絶以上のものになってるし
イヴァンさんは僕を奪う気満々になっちゃってるよおお！！

最初アーサーへの復讐だったのにいつの間にか僕を奪う方向にな
ってるよおお！！

なんで水道管を素振りしてるの？僕に水道管についた血が飛んで来
てるよ！

「ごめんなさいごめんなさい。嘘です。アーサー起きてえ！僕やられちゃうよ！僕あーさがいなくなったらどこすめばいいの？アーサーのまずいスコーンだって食べるよ！だから帰ってきてえ！」

「まずは余計だ、バカ…。」

起きた！今度こそ！？

イヴァンさんがまた水道管ふりあげてるよ！

やめてええええええ！！

カキンッ！

・・・？

「へっ、見え見えだ。馬鹿。」

「あれ？アーサー君はさっきまで僕にやられてたのにいきなり強くなっちゃった？」

「俺はもともとつええんだよ。」

アーサー！！かつこいいい！

「まあいいや。僕もそんなにユキちゃんがほしかったわけでもないし、返すよ。アーサー君。また遊ぼうね」
「やだよ」

こうして僕はアーサーに助けもらったのだ！

でめたしでめたし

「ちょっとおおお！でめたしじゃないよ！頭殴られたりした傷全治三週間！最悪だよおお！」

しらね^p^

アーサー、ユキを助ける、の巻（後書き）

ユキが途中一人称僕になったのは混乱によるためです。

作者が間違えたのを直すのがめんどくさかった、そういうわけではないんです。

迷子のユキたん

今日は平和だな〜

だからお散歩しよう。

知らない道も通っちゃうもんね〜

あはははは。ルートさんとフェリちゃんが
追いかけてっこしてるよ〜

また訓練抜けだしたのかな？

てかなんでイギリスで訓練しちゃってるの？
勝手に人の国で…っで…

ここイギリスじゃないいいいい！？

イタリアじゃあん！！

え、嘘だあ！

迷った！？

って言うか…

ちがう国に来ちゃった！？

ヤバイよ！

僕パスポートとかもってないよ！？

どうしようどうしよう！

そうだ！ルートさんに助けてもらおう！

「ルートさあああん！」

あ、フェリちゃん捕まった。

「お、おお。ユキか？なんでこんなところにいるんだ？」

「いえ、それが…。」

「ヴえゝユキちゃんだあゝ一緒に遊ぼうよゝ」

「お前はまだ訓練中だろ！」

「ヴえゝもうやめよーよ、ルートお」

「だめだ。…で？ユキはどうしてここに来たんだ？」

「いえ、それが…お散歩してたらまよっちゃったあ」

「そうか…。まあ、またずいぶん歩いたもんだな…。」

「かなり疲れたであります！」

「フェリの真似はしなくてもいい。」

しゅーん（…）これ、僕の素なのになあ…

「まあとにかく。アーサーとこまで送ってやるからついてこい。」

「はい。って、またユキ歩かなきゃいけないのおおお？」

「ああ。あるけ。」

「ええゝやだゝ歩きたくないゝ疲れたあゝ」

「いいからさっさとこい。」

「アーサー呼んで車で帰るゝ」

「だめだ。あいつをイタリアへは来させん。」

「なんでアーサーいいやつだよ？飯まづいけど。」

「それがだめなんだ。イタリアをまづい飯でいっぱいにされてはかなわん」

「そんなことするかなあ。」

「あいつならしそうだ。」

ふゝん？アーサー嫌われ者なんだなあ。

さすがに僕を迎えに来るのにまづい飯を持ってこないと思うんだあゝ
まあ、本気で怒ったらやりかねないかもねゝw

「ほら、ついたぞ。」

「ふえ？あ、ほんとだゝ」

「じゃあな。」

「ルートさんおくってくれてありがとうゝ」

「ああ。アーサーによろしく頼むぞ。」

「うい！」

「…返事はいだ。」

「はいでありますゝ」

「敬礼…するのは良いが手間差えるな…。つくづくお前とフェリア
シーノは似てるな。」

「そーですかー？」

「ああ。じゃあな。」

「じゃあねゝ」

フェリちゃんに似てるだつてえゝ

最上級のほめ言葉だよゝ

僕にとっては。

迷子のユキたん (後書き)

皆さん！

一つ言っておきます！

ユキが女になってるってこと、忘れないでくださいね…？

作者は今思い出しました おい

ハロウィン (前書き)

一日遅れましたが…。
ハロウィンネタです！

ハロウィン

「アーサー トリックオアトリートォ！」

ありゃ、噛んじゃった…。

「あ、そうか。ハロウィンか…。って一日遅くねえか？」

「いいから～おやつ～」

「ああ。スコーンでいいか？」

駄目にきまってます。

「なんだと？」

「あるえ？声に出したつもりはなかったんだけど」

「ばっちり出たぞ？」

「じゃあいいや。パンプキンパイ食べた～い！買ってきて！」

「そんぐらい作ってや」「買ってきて！！！」…ああ

やったあ パンプキンパイ～

あ、帰ってきたときのアーサーのためにいたずらしかけちゃおうと

ユキトラップ仕掛け

「よしできた！！！」

ガサガサ

「あ。ちょおど帰ってきたあ！」
「やあ、あーーーーー」

ガラガラドッしゃあああん！

「アルフレッドさあん!？」

「ちょっ！何だいこれ！HEROをこんなとこに落とすなんて全く悪趣味だなあ！」

「なんでアルフレッドさんがかかるんですかあ！」

「あ、ユキちゃん！出してくれよ。誰かがこの俺様を毘にかけたんだ」

「すいません…。それやったのユキです。」

「ええ！？キミがかい!？」

「は、はい…。アーサーを毘にかけてやろうかと思って…」

「なんだいそれ！いいアイディアじゃないか！」

アルフレッドさんの目が眩しいよ…。

「あ、でもアーサーこれに落ちたらパイが台無しになるとこだった…。」

「え…。もしかして君アーサーにパイを頼んでるのかい？」

「はい？そうですけど。」

「やめといたほうがいいよおおお!!アーサーの作ったものは食べないほうがいいんだぞ！」

「あ、大丈夫です。市販のものです。」

「それなら心配ないんだぞ」

アルフレッドさんひどいなあ。もっともなだけども。

「アルフレッドさんもパイ食べてってください。」

「ほんとかい！？ユキちゃんはやさしいねえ！アーサーとは大違いだ！」

「おい。いまなんつた？」

ひいひい！アーサー帰って来ちゃったああ

「え？居たのかい？アーサー。」

「てか何でお前がここにいるんだよ！」

「えっと…。それは俺がヒーローだからさ」

「ああ…。もういい。お前には俺様特製パイをこちそうしてやるからな（ ）により」

「い、いじめはいけないんだぞ！た、助けてくれよユキちゃあああん！！」

「お大事に〜」

うん。ほんとお大事に

「あ、アーサー！パンプキンパイユキの分はあ〜〜？」

「いたずらしようとしてただろ。駄目だ。」

なんで知ってんのおおお？

「ええ〜〜？アーサーひどいよおおお！！パンプキンパイ〜〜」

「俺特製パイならいくらでも…（ ）によよ」

「やだあ〜！」

「ふふつ。ユキちゃん。ヒーローがいるから大丈夫さ」

「パンプキンパイ〜」

ううっ！パンプキンパイ食べたいよお。アーサー特製パイなんて絶

対にいやだあああ」

「心の声ダダ漏れたぞ。」

「うえええええん」

トリックオアトリート！

だれか僕をアーサーから救ってえ！

そしてパンプキンパイっ食べさせてえええ！

じゃなきゃいたずらしちゃうぞぉ~~~~！！

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい~~~~」！

アーサー特製パイ…。

まずい…よ…う…。

がくっ…………

風邪引いたあくですよ

「ほんとに大丈夫か？」

「大丈夫だって…」

どうやら僕は風邪をひいてしまったようだ…。
熱が40度近くあるんだ…

だるいよう…。

頭痛い…。

「お粥作ってやろうか？」

「結構です。」

「遠慮すんなって。」

いやあああああ！

遠慮なんてしてないよおお！

「だ、大丈夫だよアーサー！家事とかいっつも僕やってたからアーサーとはたぶんやり方違ったから逆になんもしないほうがいいかも！」

「いいから。大丈夫だ、寝てろ。」

大丈夫じゃないよおお！

すっごく心配！とくに料理g（ゲフンゲフン

おっと、咳が止まらないなあ

「ほら、咳してんじゃねえか。早く寝ろ。」

「うつ…。間違っても料理作らないでね。」

「うるせえ、寝ろ。」

びよ、病人にうるせえって言ったよこの人！

ひどい！！

もう、ふて寝してやるううう

「じゃ、早く寝ろよ（二二）」

な、なんですか今の笑顔…。

「にこ」って言ったよ「にこ」って！

え？あれデレてきな？

てかやべえ興奮とまんねえええ

「おい」

「はい？どしたのアーサー」

「もぞもぞ動いてないでほんとに早く寝ろよ？」

もぞもぞさせてるのはアーサーのせいだよお！

「わかつたか？」

「はい…」

はう…眠いかな？

おやすみ…？

「ほうわっ！」

「わっ！なんだよ…いきなり奇声あげておきやがって…。具合は大丈夫か？」

「え？あゝ…うん。もう大丈夫っぽいよ」

「そっか、よかった。でも今日一日は寝てろよ？」

「うん。」

でもほんと気分良くなったな？

なんで？

寝てただけだし…。

僕もともと風邪とかひかないしな。

健康だからかあ

「つて、あれ？アーサーもしかしてさ、ユキのことずっと診ててくれた？」

「なっ、馬鹿！別にお前のためじゃなく…。俺にうつたら困るからなんだからな！」

ツン？ツンですねわかります

「お前今…なんか変なこと思ってるだろ…。」

「別に？思ってないよ？」

ん…。こつちの世界来てからなんかこ　　いうこと思っの多くなっ
たなあ…w

「ほ、ほんとにお前のことなんて心配してなかt）ry」

「はいはい。わかりました。」

「お前…信じてないだろ…／／／」

「ん？信じてるよ？」

「嘘つけ馬鹿あ！」

あゝアーサーかわいw

でも今回はホントにありがとう　　アーサー。

風邪引いたあゝですよ (後書き)

終わり方微妙だあゝ

ほんとにアーサーの料理食べてさらに体調悪くするユキを書きたか
ったんですが…。

めんどくさくなっちゃって

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4987v/>

あれ？あはは。転生しちゃった

2011年11月29日20時50分発行